

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年 5月 20日現在

機関番号：13301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2012

課題番号：23653286

研究課題名（和文） 「解釈力」を核にした教員養成モデルの構築

研究課題名（英文） A Proposal for Teacher Training Program on Reasoning Abilities

研究代表者

吉川 一義 (YOSHIKAWA KAZUYOSHI)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：90345645

研究成果の概要（和文）：本研究では「解釈力」を学生が獲得すべき最重要能力とし、これを涵養する方法とカリキュラムの見直しを探求した。結果、知識量減少は思考力欠如に影響し、物事を相対的に捉える解釈の視座形成が困難な実態を確認した。教材の解釈比較では、学生の知識量の豊富さが影響した。知識連関の阻害要因として、低学力の学生には自身が受けてきた授業イメージが強固にあり、これを崩すことが容易ではない事が考えられた。この修正を図る方法と内容の重要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The project places high priority on “Reasoning Abilities” of students, exploring its methodology and developing the present curriculum. Our analysis shows that the amount of knowledge correlates with the students’ cognitive and reasoning abilities, foregrounding their difficulty in establishing a coherent perspective on teaching materials. The comparative research of school textbook reading and its application clearly denotes students’ problems: those with more knowledge did better performances. Our study provides a possible but highly important explanation for the finding. Presumably, the tendency that less achieved students persist in familiar teaching styles prevents them from freer considerations on teaching materials.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：教員養成カリキュラム、解釈力、知識の構造、既存の授業イメージ

1. 研究開始当初の背景

過去10年あまり、初等・中等教育においては児童・生徒の「気づき」や「意欲」というコンセプトが喧伝され、実践されてきた。これらは、学習者の潜在的な知的好奇心を刺激し、自ら問題を発見し、積極的に学習活動を行うよう学習者を促す方策である。しかしながら、そうした教育を受けてきた（もしくは、その風潮の教育を受けた）はずの年齢層の学習にたいする自主性の向上や、それに伴って

しかるべき成績上昇という話題はほとんど耳にすることはない。むしろ、大学全入時代による学力低下や学習動機付けの減少など、自主性の向上とは対照的な事例が問題となっている。最近の指導要領の改訂によって、これまでよりも学習内容は増加したが、現在の大学生をどうするかについては大学が可及的速やかに対処しなければならない懸案事項であろう。

2. 研究の目的

教員養成教育において「解釈力」という概念は、非常に有用であると考えられる。児童・生徒の日常行動や人間関係を読み取る力、教科書の内容を把握し適切な指導をする能力、ひいては学校カリキュラムそのものに一貫性（有機的関連性）を与え構築する力などは、すべて教授者の「解釈力」に大きく依拠する。本研究では、こうした「解釈力」を中心に展開するものである。現在の学生の「解釈力」を測り、そして「解釈力」の習得に効果的なカリキュラムと教育方法を探る。

3. 研究の方法

本研究は以下の3つの研究から構成された。

(1) 研究1では、本研究の核概念である「解釈力」の意味するところを具体化するために、現在小中学校で教壇に立っているベテラン教員と初任教員を比較することによって、解釈力の因子を明らかにする。あわせて、解釈力を評価する方法についても開発をする。

(2) 研究2では、研究1の結果を踏まえ、サブグループごとに教員に必要な「解釈力」育成の具体的カリキュラムを立案した。そして

(3) 研究3では、立案したカリキュラムを本学学校教育学類3年生と4年生に対して適用し、その妥当性について検証した。

4. 研究成果

研究1. 解釈力を構成する因子の同定と解釈力評価法の開発

(1) 「解釈力」を規定する要因

まず、ビデオ収録した小学校授業をベテラン教師（教師経験15年以上）と初任教員が独立して視聴しながら、授業の進行に対する適時的コメントを収集した。これを基礎資料として、コメントの量的・質的分析を行った。

結果、コメントに関する量的側面では、初任教員に対してベテラン教員のコメント数は圧倒的に多い結果となった。質的検討では、初任教員が授業の題材内容や発問、板書等の指導法に関するコメントが多いのに対して、ベテラン教員は、題材内容に関するコメントとともに、児童生徒の発言内容や表情、仕草などの行動の様子についてのコメントが多かった。加えて、題材内容についてのコメント内容も、題材内容に関する指導事項の理解に直接関係するものから、その領域も広く関連する内容と、その範囲と知識水準の深さ、関連性にも違いが見られた。これより、初任教員は「教えること」に関する知識の活用を

重視し、ベテラン教員は、題材を理解する上での知識範囲と量ともに豊富な知識の体系をもって教材解釈していることが分かった。さらに、学ぶ側の児童生徒の知識とこれに基づく理解の違いにも着目していることが分かった。教授活動において、初任教員のコメントから指摘できる「教える技術に関する知識」は前提となりものであり、題材そのものの解釈力を支える知識体系の構造としては、直接的なものではなく、むしろ周辺に位置付けられるものと考えた。他方、ベテラン教員に見られた題材の理解・解釈に影響する知識は、解釈力の中核をなすものであり、これらの関連知識の内容とその関連性を明らかにすることが重要と思われた。

これより、題材に対する知識の活用とその構造に関する検討が必要となった。これより、要因分析的に特定の学生集団を対象に前述の課題を検討した。

(2) 「解釈力」を支える知識

本学類では3年生前期に英語科カリキュラム研究I、4年生前期に同IIを実施しているが、本研究の調査にあたっては試験的にこれらの授業を合併開講とし、それぞれの学年の学生の学力（英語力）と解釈力（英文を多角的な視点から検討する能力、応用力）との関係を探った。本授業ではイギリス文学作品（Conan Doyle, *A Study in Scarlet*）を共通教材に定め、指定した範囲から4年生が試験問題を作成し、授業において全受講者がそれを解いた後に問題の完成度について集団討論を行った。

本授業で行われる試験が通常のものとは異なっている点は、全受講者が指定範囲の英文を授業前に読了していることである。しかも、作品には日本語訳が存在するため、文章の流れはそれによって確認できる。試験を受ける時点で、受験者には初出の単語や文がないため、単純な熟語問題や英文和訳を出題してもほとんど意味がない。それゆえ問題作成者は、より深い知識や解釈を問うような問題を作成することが求められる。こうした条件において、試験問題の完成度によって作成者の解釈力を測った（4年生の英語力は3年後期の英米文学演習Dによる成績を基礎データとして活用した）。一方、3年生は上記のテストの結果によって英語力を測定し、討論におけるコメント（設問の具体的な改善方法の提示や別の視点からの設問提起）とレポートの質によってそれぞれの解釈力を判定した。なお、英語専修においては4年前期に卒業論文の分野を決定するため、それぞれの学年集団の授業受講歴はほぼ同一である。個人的な関心として、英語教育、英語学、英米文学を指向する学生は存在するものの、履修カリキュラムにおける知識の獲得条件に顕著な差異は認

められない。また、データの分析においては学生を英語力によってA、B、Cの三つに分類し、それぞれの傾向を考察した。

半期にわたる実証研究から得られたものは、英語力と解釈力の強い相関性である。

4年生の場合、英語力が相対的に低いグループ(C群)が作成する試験問題は、英文の和訳、回答字数を指定した内容理解問題、単純な単語の機能を問う問題など、基本的には大学受験に頻出する形式に準じるものであった。前述のとおり、受講生は事前に問題文の範囲を読んでくるため、事前に内容を把握しておけば容易に答えられる問題(たとえば、指示代名詞が指す内容は何か、といった問題)や単語の働きに関する単純な問題(関係代名詞の先行詞の指摘など)はほとんど意味がない。興味深いのは、こうした問題に対する批判が授業期間において何回もあったにもかかわらず、研究期間を通じてC群の学生が作成する問題は上記の傾向が顕著に見られたことである。解答状況はおしなべて他の二つのグループよりも低調であった。

他方、A群の学生が作成する問題は、大学で求められる知識に基づいたものが多く見られた。たとえば単語の機能を問う設問では、専門的な文法用語を用いないと説明できない事象の解説を求めたり、内容理解においては文章の比喩表現の傾向を問う問題を設定したりした。もちろん、すべての問題がこのようなレベルを維持しているわけではなく、中にはC群の学生が好んで出題するような問題も散見されたものの、創造性を感じさせる問題はA群の学生が出題していた。解答状況については、3年後期と同様、最も高い学力を示した。

B群の学生は極端な傾向があった。試験の解答成績はA群と遜色ないが、問題作成の場合はC群の試験問題に類似した問題を提示してきた。

3年生の研究結果はより単純である。解答状況と学力はほぼ比例関係にあり、英語力が高いグループの学生は4年生の作成した問題に対して、より具体的なコメントを提案した。他方、英語力の低いグループは発言も少なく、レポートを見ても授業中の討論のまとめという印象が強い。

A群やC群の学生による設問は、それぞれのグループの解釈力の高低を明確に表す。問題作成に当たっては、作成者が自身の英語力を超えた問題を作ることは理論的に不可能である。しかしながら、C群の学生が最後まで既知の設問スタイルから脱却できなかった理由を、大学における学習の不足に還元するのは単純すぎると思われる。重要なことは、なぜ大学における授業履修歴が似通っているにもかかわらず、解釈力の点で大きな差がつくのかということである。そういった意味

では本研究の結果でもっとも注目すべきはB群の傾向である。英語力はA群と大きな差がないにもかかわらず、設問の創造性に欠けるという現象は、学力と解釈力の関係が単純な移行関係、すなわち学力がつけば解釈力も上昇するという認識を否定する。

討論においては、作成者は質問者からの質問に答える形で、設問の意図を説明する。そこにおいてA群とB群の学生のコメントの違いは、解釈力の涵養について示唆を与える。A群の学生は英語に関する知識だけではなく、扱う教材の歴史や文化についての理解や現代における事象への換言能力といった事項について高い能力を発揮した。こうした傾向はB群、C群の学生にはあまり認められなかったもので、情報の処理の仕方に差異が認められるのである。すなわち、A群の学生は抽象的思考を求める傾向が高く、獲得した知識を有機的に関連づけようとする態度が目立った。

研究2と3. 教員養成カリキュラムの立案と検証

(1)「解釈力」を支える知識獲得と知識活用の問題

当学類英語専修では台湾師範大学と交換留学を実施しており、参加学生はそれぞれの国の学校(小中高のいずれか)で英語による実践授業を行う。本研究における学力と解釈力との関係を調査するために、合計2ヶ月(平成23年度、24年度にそれぞれ1ヶ月)にわたって台湾からの留学生と本専修の派遣学生を対象に、日本と台湾において観察および聞き取り調査を行った。

台湾師範大学は台湾で最も有力な大学であり、英語系も英語教員の養成において非常に大きな実績がある。当学類のカリキュラムとの最大の違いは、初年次、2年次での重点的な英語運用力の養成である。本学類においては、共通教育の履修などの制限によって学類担当の専門性の高い授業がほとんど存在しない一方で、台湾師範大学は入学時から会話や作文に力点を置いた英語授業を展開する。また、そこでのタスク量は金沢大学とは比較にならず、学生の英語運用能力の向上に貢献している。

留学プログラムにおいては台湾師範大学の学生は当学類附属中学校、および高校で英語の授業を行い、当学類の派遣学生は地元の小中学校で、当該学校が使用している教科書を使って同様の授業を行う。報告者は二大学の学生の事前指導、教材のアドバイス、授業の内容検討、反省会等、すべての場面に同行しそれぞれの学生の傾向を観察した。

カリキュラムや入学時の成績の差から推

察されるように、英語力に格段の差があるのは検証を待つ必要がないが、顕著な差異として認められたのは、二つの学生グループの解釈力である。教材の使用法、展開方法のオリジナリティ、学習プリントのねらいの的確性、プレゼンテーション方法などにおいて、台湾師範大学生が自国の英語授業形式に拘泥しない非常に自由な発想を見せた一方で、当学類の学生は日本の英語授業のスタイルをそのまま台湾に持ち込んだような授業を行った。台湾師範大学の学生への聞き取り調査では、英語の知識のみならず、他国の文化、政治、経済など一般的な事象についての知識も、当学類学生のものを上回っていた。

研究1の結果と関連づければ、知識の絶対量が解釈力に大きな影響を与えるということ、二国の学生によって確認したことになる。知識の有機的な蓄積が、台湾師範大学の学生が授業スタイルの臨機応変な切り替えを容易にし、たとえば初回の授業での反省点を生かして、次回の授業展開を大幅に変更するという通常の学生の教育実習では見られないようなことまで実行していた。一方、当学類の学生の場合、入念な事前の指導案によって実習を乗り切ったという印象が強い。

当学類の学生への聞き取り調査で明らかになったのは、こうした学生間の差を英語力の違いで説明しようとしていたことである。確かに英語で展開する授業において、英語力は非常に大きな要因となる。しかしながら、台湾師範大学の学生の的確な状況判断力や行動力を比較すると、英語力の差は当学類の学生が認識しているほど大きな原因ではなく、むしろ知識活用の仕方に問題があるように思われた。台湾師範大学の留学生は抽象的思考能力が高く、報告者の事前指導や事後指導においても常に他の知識と関連づけようとする傾向が非常に目立った。

これら観察結果は当学類における教員養成の批判としても浮上する。当学類のカリキュラムは実践を重視したものとなっており、「即戦力のある教員を育成する」という趣旨に適合したものになっているものの、ややもすると学生はテクニックを授業法の中心的要因にとらえがちである。そして、これは交換留学プログラムにおける学生の英語力の欠如の意識と合致する。英語教員の場合、英語運用能力は授業を行う上での最低資質であり、そうした能力を獲得の一方で教材を自由に用いるためには有機的に関連づけられた様々な知識が求められる。今回の留学プログラムの調査は、知識の必要性を具体的に裏付ける結果となった。

5. 主な発表論文等
該当なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉川 一義 (YOSHIKAWA KAZUYOSHI)
金沢大学・学校教育系・教授
研究者番号：90345645

(2) 連携研究者

山本 卓 (YAMAMOTO TAKU)
金沢大学・学校教育系・教授
研究者番号：10293325

武居 渡 (TAKEI WATARU)
金沢大学・学校教育系・准教授
研究者番号：70322112

江藤 望 (ETHO NOZOMU)
金沢大学・学校教育系・教授
研究者番号：60345642

尾島 恭子 (OJIMA KYOKO)
金沢大学・学校教育系・教授
研究者番号：20293326

長谷川 和志 (HASEGAWA KAZUYUKI)
金沢大学・学校教育系・准教授
研究者番号：50349825